

カルロ・クリヴェッリとその工房《カステル・トロジーノ祭壇画》再構成

上原 真依(大阪大学大学院)

ヴェネツィア出身の画家カルロ・クリヴェッリ(1430/35-1494?)は、1468年以降、マルケ地方南部で活動し、多くの多翼祭壇画を制作した。しかし現在、その祭壇画の多くはパネルごとに解体されて各地に分散(一部散逸)しており、当時の姿を留める例は少ない。国立西洋美術館が所蔵するクリヴェッリ作品(作品番号P1962-5)もまた、解体された多翼祭壇画の1パネルと考えられる。本発表は、オークションカタログ調査や各パネルの実見に基づく新知見、アスコリ・ピチェーノでの史料調査と周辺作例の現地調査を通じて、国立西洋美術館のパネルを含む多翼祭壇画の再構成を試みるものである。

この多翼祭壇画に関しては、フェデリコ・ゼーリが1961年に発表した研究で再構成を試み、この説が基本的に受け入れられてきた。ゼーリはパネルのサイズ並びに様式上の類似点を根拠に、以下の4点が同じ祭壇画を構成したと考え、その本来の設置場所はカステル・サン・ピエトロのサン・ロレンツォ聖堂であった可能性が高いとした。

《聖ラウレンティウス》(ルガーノ、ティッセン・ボルミネッサ・コレクション旧蔵)

《司教聖人(聖アンブロジウス?)》(マーストリヒト、ボンネファンテン美術館)

《司教聖人(聖アウグスティヌス)》(国立西洋美術館)

《洗礼者聖ヨハネ》(オックスフォード、アシュモレアン美術館)

発表者もゼーリ同様、この4点のパネルが同一の祭壇画を構成していたと考える。その新たな根拠として、4点のパネルのうち2点に共通する来歴が見られること、2点の司教聖人パネルに残る枠縁の輪郭線がほぼ同じ形をしていることをあげる。

しかし、発表者は以下の3点についてはゼーリ説を修正する必要があると考える。1)ゼーリは全身像4点からなる祭壇画を想定したが、現存するパネルの状況から判断すると、半身像2点と全身像2点で構成されていたと見る方が自然である。2)作品に関する1487年の記録文書によると、祭壇画の代金を支払ったのはアスコリ・ピチェーノ近郊の小村カステル・トロジーノの司祭であった。したがって祭壇画は、ゼーリのいうカステル・サン・ピエトロではなく、このカステル・トロジーノにあるサン・ロレンツォ聖堂のために注文されたと思われる。3)ボンネファンテン美術館所蔵の司教聖人は、従来、主にヴェネツィアにある類似作例を根拠に、聖アンブロジウスとされることが多かった。しかし発表者は、マルケ地方南部のベネディクト会関連施設に残る作例を調査した結果、この聖人が聖ベネディクトゥスである可能性が高いと考える。この説は、1712年に残されたアスコリ・ピチェーノの司教による聖堂巡察記録の記述とも一致する。

今回発表する再構成説は、これまで調査の行き届かなかったマルケ地方の作品例や史料を根拠に導かれたものであり、散逸作品の多いクリヴェッリ祭壇画の今後の研究にとっても意義のあるものだと考える。